

私の履歴書

江 頭 匡 一
え がしら きょう いち

②

私の人生は大きく三つに分けられる。三菱の幹部社員だった父、佳造に反発しアウトロー的人生を過ごした少年・青年時代。戦後の混乱期に占領軍の指定商

人として自らの発想と才覚で事業を拡大し、野心に燃えていたころ。そして、せっかく築き上げたものが、国税局の脱税の摘発で大きく挫折。ゼロからの出発を誓い、飲食業の産業化を生涯の志として夢を追ってきたその後の人生である。人生には一大転機が訪れる。

私には、一九五四年（昭和二十九年）の査察がまさにそれだった。これを機に本当に人間が変わったと思う。それまではよく仕事もしたが、遊びも半端ではない。ウソはいけないがホウはいいと、大きなことを言っただけで周囲を驚かせたものだった。それが妻憲子をして、「査察後のあなたはまるで別人のように面白くなかった」といわれたほどだ。

国税査察、すべて失う

野心捨て、志を追う人生に

戦後、米軍基地の見習いコックから出発。やがて最大手の米軍PX（売店）指定商人として、事業をどんどん拡大していた当時、私はまだ二十代。豊かな米国にあこがれ、金持ちになることが生きがいだ、まさに得意の絶頂のときだった。

実は、国税局の本格査察を受ける前に、脱税の事前警告を受けたことがある。五一年、当時、国税局の外事特別調査官だった

作家の小島直記氏が、密告書と内偵書類を持って会社に来られた。初め突っ張った私は、「私がつくった会社だ。会社のためにしたことが法に触れるなら、こんな会社は私の手でつぶしてしまう」と開き直った。すると、小島氏がじゅんじゅんとさすように言った。「国家はあなたに生命と財産の安全を保障している。そのために税金を払う義務があるが、あなた



二つの故事に人生の苦境を救われた（自宅）

二十年も忘れていたはずのこの言葉に教えられ、「これからは金持ちになろうなどという野心を捨てて志を打ち立てよう」と心に誓った。そして、一生を通じて変わることなく、一つのことをやり遂げる人生を送りたいと考えた。その一生の仕事に選んだのが好きな食べものの仕事であり、「遅れた日本の飲食業を米

いく。

こうして十年近く、一日も休むことなく早朝から深夜まで働いて築き上げたものをすべて失ってしまった。しかも前後して長男の翼（よく）を自宅の池での事故で失う不幸も重なる。激しい精神的な落ち込み。一時は死を考えたほどだった。そのとき、心の支えとなり、その後の人生で自らの教えとなつたのが、「脚下照顧」「漁夫生涯一竿（いっかん）」の二つの故事だ。禅宗に帰依していた父が勉強部屋に掛けてくれていた書だが、その言葉がなぜか苦境のときに鮮やかによみがえつたのだ。

その言葉に男泣きした私だったが、小島氏の忠告に完全には従わなかった。そのつけが何倍にもなって返ってきた。三年後に本格的な査察を受けて脱税を摘発され、追徴金や重加算税を払うことになった。合わせると七千万円近く、今の金額で二十億円ほどだ。会社の資金はほぼゼロに。一年間、徴税官が会社の事務所に常駐。最低限の固定費と運営費だけ残して徴収して

（ロイヤル創業者取締役）